

経歴

平成17年 4月 総務省採用
同 消防庁予防課
平成17年 8月 北海道企画振興部地域振興室市町村課
平成18年 4月 同 総務部財政局財政課
平成19年 4月 総務省大臣官房秘書課
平成20年 7月 同 自治税務局市町村税課
平成22年 4月 同 自治税務局企画課
平成23年 6月 米国留学(ミシガン大学)
平成24年 8月 現職

Think Globally, Act Locally
—世界に誇れる制度設計を—

PROFILE
25

カリフォルニア大学ロサンゼルス校

圓増 正宏

Enso Masahiro

2011年6月某日、成田発デトロイト行の某機内にて。

キャビンアテンダントから「何か飲み物は？」と聞かれ、私は「Water」と一言。さすがに通じるだろうと思っていたところ、私の目の前に差し出されたのは、日本で知らない人はいない例の茶色い炭酸飲料。自らの英語力にとてつもない不安を感じながら、2年間の留学生活が始まりました。

彼も人なり、我も人なり：アメリカの話

1年半が経ち、ミシガン大学(公共政策)、カリフォルニア大学ロサンゼルス校(法律)にて学ぶ機会を得ました。経済学や計量分析に始まり、都市と環境の調和を扱う都市工学系の授業、仕事以上にきっと家庭内での妻との対話(最重要案件)に役立つであろう交渉術の授業、などなど学ぶもの全てが新鮮な日々。しかし、授業の中身以上に、日常生活は、「日本人には日本人の理屈(価値観)があり、アメリカ人にはアメリカ人の理屈がある」というシンプルな事実を改めて教えてくれます。例えば、ハンバーガーショップで、全てのトッピングを選べる(選ばなければならない)ことは、アメリカ人の「選択」への尊重とも言えますし、見ず知らずの人が私の子供たちに優しく話しかけてくれることは、日本のクローズな人間関係とは対照的です。

「アメリカでは～」と舶来ものを何でもありがたがるのではなく、日本というガラパゴスに閉じこもるのではなく、「自分たちも彼らもそれぞれの考えをもった等身大の人間」という意識をもつことこそが、これからの日本をデザインするときに必要なことなのだと思います。

受容上手の発信下手：日本の話

私は日ごろから「日本人は受容上手の発信下手」だと思っています。明治維新や戦後の経済成長に見られるように、海外の知識をコピーし、取り込んでいくことについては、日本は過去非常に高い成果を上げています。また、上から下へ、国から地方へ、本社から支社へという具合に日本全体にその取り込んだ内容を普及させる中央集権的な仕組みうまく機能してきました。

しかし、人口減少やグローバル化など、私たちが現在直面する課題には、もう模倣すべき「お手本」はどこにも存在しません。私たちが抱える課題こそが世界最先端であり、私たちが世界に「お手本」にされるような解決策を打ち出していかなければならないのです。

そして、そこに求められるのはトップダウン型よりはむしろボトムアップ型の仕組みです。いろいろな関係者を巻き込んで地に足のついた議論をし、できることからたとえ前例がなくても実行していく。「地域発」が日本全体へ、そして世界へ発信されていく。そんなプロセスこそが、今の日本の停滞を打開してくれるのだと思います。そして、私のような海を渡った人間がすべきことは、アメリカからありがたい教えを「持ち帰る」ことではなく、議論の風土を「育み」、その成果を日本全国、そして世界に「発信」することなのでしょう。

大人の国になるために：日本と私とあなたの未来の話

私は今年30歳です。あと15年もすれば、現在3歳の息子に体力では圧倒されてしまいます。しかし、私は18歳の息子に対して、

大人として何もしてあげられないのでしょうか。

同じことが日本という国にも言えます。人口だけで見てみれば他の新興国に勢いが出るのは自然なことです。体力だけで張り合おうとするのではなく、どれだけ大人として振る舞えるか。英国が、相対的な経済的地位はかつてほど高くないにも関わらず、国際的な場での発言に重みがあるのは、民主主義や国際政治に対して英国が担ってきた役割の大きさ故ではないでしょうか。優れた制度を持つ国の発言には重みがある、これが正しいとすれば、山積する国内課題をいかに解決していくか、という一見「ドメスティック」で地道な作業こそが、国際的地位の確立への一番の近道なのだと思います。

私は、総務省という日本の制度の根幹をつくる場所において、10年後「日本では～」と世界中の大学の授業で取り上げられるような制度をつくっていききたい。あなたがその仲間になってくれるのならばこんなに嬉しいことはありません。



ミシガン大学の友人たちと(筆者右から3番目)

PROFILE
26

ペンシルバニア大学

高橋 真紀

Takahashi Maki

Creating Dots for the Future!
—アメリカ建国の地から5年間を振り返って—

経歴

平成19年 4月 総務省採用
同 総合通信基盤局国際部国際経済課
平成20年 7月 同 行政評価局客観性担保評価プロジェクトチーム
平成21年 7月 同 大臣官房秘書課
平成22年 7月 同 総合通信基盤局電気通信事業部事業政策課基幹通信係長
平成24年 7月 現職

6年前…

「働くとは、社会に守られていた側から社会を創る側が変わること」。就職活動の際、とある企業の説明会で一瞬だけ画面に映ったこの言葉を、今でもよく思い出します。

自ら起業した父の背中を見、景気が(特に)中小企業に与える影響の大きさを感じていた私の夢は、努力した人が成功できる安定した経済を創ることでした。その夢を最も実現できる場を探していた大学時代、参加した様々な業種のインターンシップの一つであるWebサービスのベンチャー企業での経験が、思い返せば総務省に入省したきっかけでした。インターネットを舞台に若い経営者が新しいアイデアと少額の資本金で事業を立ち上げる現場に立ち会い、またGDP成長率の約3割を情報通信産業が牽引しているという事実を知った時、情報通信産業を支える仕事に就くことが自身の抱えてきた夢を実現するために最適のツールだと確信し、総務省の門を叩きました。

そして5年間

入省してから5年間、様々な行政課題を司る総務省で、入省時には予想していなかった数々の経験に恵まれました。スイスとのEPA交渉、米国との規制改革交渉に立ち会う中で各国の情報通信規制を必死に学んだ国際部、各省・有識者の方々と議論を重ねる中で新たな政策の評価手法を検討した行政評価局、スマートフォンの急速な普及に伴い変化する電気通信市場において、公正な競争環境を創出するための制度整備を行った電気通信事業部。気づけば3つの全く異なる政策分野を経験した5年間は、異動直後から専門家としての意見を求められるプレッシャー、取扱う

業務の重さを時に辛く思うことが全くなかったとは言えません。しかしそれ以上に、日々変わりゆく市場環境から生み出される前例のない新たな行政課題への取組む毎日、刺激的で、自らに常に新たな挑戦を課すことのできる環境に感謝しつつ、あっという間に時間が過ぎてしまいました。

そして今

Google, Apple, facebook …。前職で電気通信市場の規制を取り扱う中で、著しく変化する市場に適した規制制度を新たに構築する必要性を強く感じ、昨年の夏からペンシルバニア大学のロースクールに留学する機会をいただき技術産業政策、競争法を学んでいます。SNSにおけるプライバシー侵害にどのように対処するかといったまさに総務省で取り組んでいた課題から、知的財産権はイノベーション促進のために本当に必要なのか、規制は何のためにあるのかといった根源的な問いまで、世界各国から集まるクラスメイトの弁護士と授業で、時には飲みながら(!)語りあう日々は、言語や文化の違いといった壁を感じる暇さえ与えられない、非常にエキサイティングな経験です。また教授と生徒の距離も近く、オフィスアワーに気軽に教授を訪ね、授業の質問にとどまらず、研究計画や将来設計まで第一線で活躍する教授からアドバイスを受け、研究分野の著名な研究者とネットワークを作る機会も得ています。

留学を経て思うこと

留学に来て半年経ったある日、故スティーブジョブズ氏の有名なスピーチの一節を思い出しました。“you can't connect the dots looking forward; you can only connect

them looking backwards.” 留学生活において、規制政策の授業では行政評価局での経験をもとに日本の規制制度を紹介することで議論に貢献し、電気通信政策に関わっていた経験から教授の研究のお手伝いをさせてもらう機会をいただいたといったように、今までの総務省での多様な経験(dots)が留学における研究を進める上で不可欠な要素となっていること、そして留学の機会を通して、今まで時にはバラバラに思えた経験が有機的につながり自身の糧になっていくことを強く感じています。多様な行政分野を担う総務省はそのようなdotsを得るには最適の場所であると感じると同時に、帰国後にさらに多くのdotsを得、つなげていくことが今から楽しみです。

“You've got to find what you love.” とスピーチは続きます。皆さんが就職活動の中でそのきっかけを見つけられることを願うと同時に、私が総務省でそれを見つけたように、皆さんにとってその場所が総務省であるのであれば非常に嬉しく思います。帰国後に、意欲あふれる皆さんと、刺激的な毎日の中でdotsを作り上げていくことができるのを楽しみにしています!



クラスメイトとお手製料理で international food party! (筆者一番右)